

## 人と植物とのかかわりを探る(12)

誌名	農業および園芸 = Agriculture and horticulture
ISSN	03695247
著者名	松尾,英輔
発行元	養賢堂
巻/号	91巻6号
掲載ページ	p. 634-640
発行年月	2016年6月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 人と植物とのかかわりを探る [12]

## 動植物を介在させた福祉活動—園芸福祉から生きもの介在福祉まで

松尾 英輔 \*

〔キーワード〕：植物介在福祉，植物介在療法，植物介在活動，生きもの介在療法，生きもの介在活動

## はじめに

植物とのかかわりの一つである園芸が私たちに、癒し、喜び・愉しみなど、いわゆるしあわせ（幸福、福祉）をもたらしてくれることは、昔から体験的に知られていたことである。これを、園芸の賜物（The gift of gardening）（芦沢 1992）、園芸の効用（松尾 1997, 1998b, 2002）、庭からの贈り物（南野 1997），“Gardens make us happy”（庭は私たちをしあわせにする）（Grant 1996）などと表現したものがあるが、もっと直截的にわかりやすく表現した言葉が「園芸福祉」（Horticultural Well-Being, HWB）である（松尾 1998a, b）。なお、福祉という言葉の英語訳としては、従来 Welfare が一般的に使われてきたが、筆者（1998b）は fare（小稲 1981）に含まれる経済的なニュアンスよりも、being（小稲 1981）に感じられる心身面の状態や暮らしのあり方を重視し、welfare ではなく、well-being, wellbeing を用いた。以下本稿では、福祉の英語には wellbeing を用いる。

その園芸は、植物の成長に積極的にかかわる活動である（松尾 1986, 1987; Matsuo 1992）。しかし、植物とのかかわりには、食べたり、見たり、触ったり、嗅いだり、風にそよぐ木々の葉擦れの音を聴くというように五感で知覚すること、野菜や果物を収穫するように四肢五体を使って手に入れること、デザイン、言葉、映像などのイメージとして植物をとらえることなどの活動もある。これらも園芸と同じように、私たちに癒し、喜び・愉しみなどしあわせを与えてくれる。

植物にかぎらず、動物とのかかわりもまた私たちにしあわせをもたらしてくれる。たとえば、ペットとしてイヌ、ネコ、その他小動物を飼って癒されたり、喜びと元気を得ていることは日常的に話題にな

る。また、治療・介護の場で動物に触れることによって、癒され、元気をもらい、よりよい効果を得るといような例も知られている。

このような植物、動物を含めた生物・生きものとのかかわりがもたらすしあわせについては、多くの人が体験的には知っている。それにもかかわらず、空気存在に気付かないのと同じように、当たり前のこととみられて、意識されることが少なかった。またそれを表現する適切な言葉がなく、話題にされることはほとんどなかった。

本稿では、園芸福祉の考え方を足掛かりに、植物と動物を含めた生物・生きものとのかかわりを活かした福祉活動について、用語の整理を含めて考えてみたい。

## 1. 園芸福祉—園芸療法と園芸リクリエーション

「福祉」はしあわせ、幸福を意味する言葉である（松尾 2008）ところから、園芸を通してしあわせ（幸福）を推進しようという考え方を表現した言葉が「園芸福祉」である（松尾 1998a, b）。もともと園芸は、私たちに癒しをもたらす、喜びや愉しみ、さらに希望や意欲、健康を与えてくれるなど、しあわせにしてくれる役割をもっている。それは一般には「庭仕事の愉しみ」（岡田 1996）、「園芸は楽しい」、「園芸はおもしろい」、「園芸はよい運動になる」、「園芸にはまる」などさまざまな表現で賛美されていたが、一言でその意義や役割を表現する言葉がなかった。

この「園芸によるしあわせ」、「園芸を通してのしあわせ」を「園芸福祉」という言葉で表現するようになったきっかけは、1990年代における園芸療法の普及・発展である（松尾 1998a, b）。すなわち、園芸療法の普及に伴い、園芸療法士の資格制度の確立が求められるようになり、園芸療法の定義を明確にする必要性が生まれた。他方、園芸療法は病気になった人が対象であり、とくに地方自治体が直面し

\*園芸福祉研究所・九州大学名誉教授（Eisuke Matsuo）

ていた、元気高齢者が寝込まないようにする健康対策としてはなじまないことが明らかになってきた。

このような実態を踏まえ、園芸のもたらすすべてのよい効果を活かして、治療やリハビリテーションなどの療法的側面だけでなく、健康の維持・増進を含めた、暮らしのあらゆる側面でよりよい生活を送り、しあわせになる（幸福になる）ことを促進しようという意味で提唱された言葉が「園芸福祉」なのである。

つまり、園芸福祉は、園芸を療法的に活用する領域とそれ以外の領域とを含むとらえ方である。前者は園芸療法である。後者については、当初は適切な言葉がなかったが、園芸によって心身共に元気になる、元気を取り戻すというような側面をもつところから、「園芸リクリエーション」という言葉が提唱されている（松尾 2011, 2012, 2013）。参考のために、園芸を通しての療法的活動とそれ以外の活動を取りまとめて表 1 に示した。

その後、園芸療法の場合では、媒体として用いる（介在させる）園芸の限界も議論されるようになってきた。もっとわかりやすくいえば、療法の媒体として用いる「園芸」とは何か、という疑問である。

実際、花壇や公園で花を観・鑑賞すること、観光農園で果物狩りをすること、芋やラッカセイを掘り取ること、買った花あるいはもらった花で、生け花やフラワーアレンジメントを楽しみ、ブーケをつくり、押し花をし、花絵を描くことなど、誰かほかの人が育てた園芸植物と断片的にかかわることは、「園芸活動」とか「園芸をする」とは、決していわないからである。

園芸の本質は、生きた植物と向き合い、その世話や手入れをすることである（松尾 2005a, 2007）。いいかえれば、植物を育てることである。植物と時間を共有することだともいえる。生きた植物の成長

を辛抱強く見守り、植物が求める要求を推察しながら、それに対応する処置を行うのである。

植物は世話をする私たちの意のままにはならないし、成長に時間がかかり、それを待つ辛抱・我慢が必要になる。手入れをした植物を収穫し、観・鑑賞し、工芸作品をつくることは、園芸活動の締めくくりになるもので、育てる喜びをさらに高める役割を果たす。つまり、先に述べた育てない植物の観・鑑賞や収穫などの諸活動は、園芸活動の成果をつまみ食いするものであって、園芸（活動）にはあたらないのである。

とはいえ、観・鑑賞の喜びも、収穫の喜びも、さらに工芸作品や文芸作品を創作する喜びも、療法的に十分効果を発揮できる要素である。また、植物は身近にあるだけでも、人に安らぎを与える。

実際、寝たきりの人が窓の外に見えている樹木が芽を出し、花を開き、緑が濃くなり、そして紅葉して散ってゆくことに四季の移りを感じ取って感動したり、慰められたり、枕元にある水栽培のヒアシンスの花を見て思わず顔の表情が和らぎ笑顔が浮かぶという。これもまた、植物を療法的に活用できる要素である。

このように、手入れ・世話をしない植物も療法的に活用しうることを考えると、植物を育てることだけでなく、育てない植物も含めて療法的に活用するというとらえ方が必要となることがわかる。これをあらわす言葉が次に述べる「植物介在療法」である。

## 2. 植物介在療法と植物とのかかわり方によるその分類

植物介在療法（Plant Assisted Therapy ; PAT）は、園芸療法（Horticultural Therapy ; HT）と、それとは違うかかわり方を活用する療法とを含むとらえ方である（松尾 2005a, 2006, 2007 ; Matsuo 2008）。

表 1 園芸福祉：園芸を活用する療法的活動とリクリエーション的活動

活用の種類	療法的活用	療法以外の活用
名称	園芸療法	園芸リクリエーション
要件	対象者が療法的かかわりの必要な人に限られる	すべての人 対象者は限定されない
主な活動	療法としての手続きが必要 治療、リハビリテーション、 介護・ケア	個人的活動、団体活動いずれでもよい 療法以外のリクリエーション活動、ボランティア活動、体験活動、 健康の維持・増進、文化の伝承、交流事業、まちづくり・仲間づくりなど

それらはどのように異なるのであろうか。簡単にいえば、療法の場合において、「植物を育てるかかわり」を主に活用する場合と、「育てない植物とのかかわり」を主に活用する場合とである。前者が「園芸療法」であり、後者が「植物感芸療法」(Plant Perceptive Therapy ; PPET) である。

後者では、育てることにはむすびつかない、断片的なまたは一時的な植物とのかかわり、たとえば、見る、触れる、聴くなどの五感を通じた感覚体験、野菜や果実、花の収穫、植物を用いた作品の制作など四肢五体を用いた動作体験などの「狩る」かかわりを療法として活用する(松尾 1998)。

この療法は、さらに細かくみると、単に手に入れるかかわり(狩る行為)を主とする「植物受容療法」(Plant Acceptive Therapy ; PACT) と、手に入れた植物に手を加えて何かをつくるかかわり(造る行為)を活用する「植物工芸療法」(Plant Art Therapy ; PART) とに分けられる(表2)(松尾 2005a, 2006 ; Matsuo 2008)。

このように、植物を媒介として、あるいは、植物を介在させる(媒体とする)ことによって、療法の効果を上げるのが植物介在療法なのである。植物とどうかかわり方をするのかのいかんは問わない。植物とのあらゆるかかわり方を活用する諸療法の総称である。

植物介在療法という言葉は、「動物介在療法」(Animal Assisted Therapy ; AAT) に対応する言葉として提唱されたものであるが、その後考え方の整理とともに名称の変更を提案してきたので、その変遷を記しておきたい。

当初、生きもの(動物、植物)を用いた「生きも

の療法」のなかの「動物療法」(Animal Therapy) に対応する言葉として「植物療法」(Plant Therapy) を用いた(松尾 1998b)。「園芸療法」や「葉草療法」(Phytotherapy) (ヴァイス 1995)、「花療法」(Flower Therapy) などは「植物療法」に含まれるものとみなしたのである。

その後、植物を用いた療法でも、植物を育てる行動を活用した「園芸療法」と、植物を育てないで狩る(狩るまたは造る)行動を活用した療法とでは、かなり性質が異なることから、後者を「植物介在療法」とした(松尾 2002)。しかし、園芸もまた植物を媒体とする(介在させる)点では同じであること、また、クライアントと療法士の中に植物を介在させるところに特徴があり、そのことを明確にしておくのがわかりやすいことなどの理由から、園芸を含めて植物を媒体とするあらゆる活動を療法的に活用する場合を「植物介在療法」と改めた(松尾 2005a, 2006)。

現在、施設や研究室の名称として公に「植物介在療法」を使っている例は、東京農業大学農学部バイオセラピー学科における「植物介在療法学研究室」くらいではなかろうか。

2004年のことであるが、東京農業大学にバイオセラピー学科設立の準備が始まったときにも、「植物介在療法」という言葉が話題に上った。新学科立案の作成にかかわったメンバーの一人として印象深い出来事なので、簡単に紹介しておきたい。

当時は動植物とのかかわりを療法的に活用する領域、すなわち、動物療法や園芸療法への関心が高く、新学科にも動物と植物を療法的に活用する「生物介在療法分野」を置くことが決められた(門間

表2 植物介在療法(Plant Assisted Therapy ; PAT) の分類 : 療法において活用するかかわり方による名称

かかわり方の種類 行動 (行為)	療法の名称	活用する主なかかわり方
育てる	園芸療法 Horticultural Therapy (HT)	栽培 (手入れ・世話)
狩る	植物感芸療法 Plant Perceptive Therapy (PPET)	(下記のようなかかわり方)
(狩る)	植物受容療法 Plant Acceptive Therapy (PACT)	五感での感知や四肢五体での収穫など
(造る)	植物工芸療法 Plant Art Therapy (PART)	植物を使って何か(イメージも含む)を造ること

松尾(2007)を一部改変。

2005；松尾 2005b)。その分野は動物を療法的に活用する研究室と植物を療法的に活用する研究室を含み、まず動物を活用する研究室の名前は「動物介在療法学研究室」と決まった。これに対する植物分野については、これまでよく知られている「園芸療法」という言葉を使うことには異論が出た。

先に述べたように、療法の中では、植物を育てる園芸だけが活用されているわけでない。育てるといふ園芸の本質を理解しないで、園芸生産物の収穫、生け花、押し花、リースやブーケづくりなど、園芸植物を療法の場で使っているというだけで、園芸療法と称して実践している例が非常に多かった。その実情からみれば、園芸であろうとそうでなかろうと、植物を使っている（媒体としている）という事実を重視して「植物介在療法」学研究室のほうが適切ではないかというのである。

植物と動物とは対比しながら論じられることが多いことを考えると、「動物介在療法学」研究室に対しては、「園芸療法学」研究室よりも「植物介在療法学」研究室のほうがわかりやすい。実際、植物を用いた療法の現実をみると、「園芸療法」よりも理論的には「植物介在療法」のほうが適切であることは、関係者の一致した見方であった。しかしながら、市民の間における知名度の点でいちじるしい差のあることが問題となった。

すなわち、園芸療法という言葉は一般にも浸透していて、聞いただけでもどんなものかをイメージすることができる。これに対して、植物介在療法については、専門家でも、聞いたことがない、知らないという人がいる。一般市民には、聞いたこともない人がほとんどであろう。どんな研究室があり、何を学べるかを示すには、大学案内を見る人たちにも知られている言葉がのぞましい。

したがって、当面は「園芸療法」という言葉を使用し、園芸療法の発展にともなって、もっと植物を活用した療法が普及・定着したときになって「植物介在療法」という名称にしてはどうか、というのである。

このようないきさつから、「植物介在療法」という言葉は学科新設の計画書には採用されず、「園芸療法学研究室」が誕生することになった。その後、学科が発足して4年後、2010年から名称を変更して「植物介在療法学研究室」と名乗ることになった。

### 3. 植物介在福祉から生物介在福祉を考える

動物を活用した治療や福祉活動は、名称のうえでは、すでにかなり明確に区別されている。獣医師広報板（2003）に紹介された資料を、園芸療法の視点を加えてわかりやすく紹介すると、治療法の一つとして、すなわち、療法的に、動物を活用するときには「動物介在療法」(Animal Assisted Therapy; AAT)、そうでない場合には、動物と過ごす活動とみなされ、「動物介在活動」(Animal Assisted Activity; AAA)と呼ばれる。施設や病院などで、入所者の福祉をはかる目的で、動物との触れ合いを行う活動は動物介在活動にあたる。

療法であれ、活動であれ、広義には動物を媒体として私たちのしあわせ（幸福）をはかろうとする活動は、動物を介在させて私たち人間の福祉をはかるという意味で「動物介在福祉」(Animal Assisted Wellbeing, AAW)ということになる。なお、英語で Animal Assisted Welfare という言葉も検索される (Herring 2016) が、園芸福祉の項で述べたように、しあわせな状態、存在を示すのであれば、用語として用いる場合には、Animal Assisted Wellbeing (AAW) が適切であろうし、検索エンジン Yahoo でもこちらの方が検出件数が多い (2016)。

なお、これに似た言葉に「動物福祉」(Animal Welfare)がある。これは、動物を通しての私たち人間のしあわせ（福祉）をはかることではなく、動物自体のしあわせ（福祉）をはかろうというものである。

たとえば、石川（2010）は「人間が動物を所有や利用することを認めたらうで、その動物が受ける痛みや苦しみを最小限にすること」と解釈し、アニマルウェルフェア（動物福祉）推進ネットワーク（2011-2015）は、「家畜だけでなく、愛玩動物、展示動物（動物園等）、実験動物など、人間の飼育下におかれたすべての動物に対する福祉」と述べている。動物介在療法や動物介在活動の領域で考えれば、活用される動物が受けるストレスをいかに解消するか、軽くするかなどもねらいの一つとなる。

いずれにしても、動物福祉に介在という2字を入れて「動物介在福祉」とすることによって、意味がまったく違ったものになってしまう点に注意しておきたい。

表3 生きものを活用して福祉(しあわせ・幸福)をはかる活動の種類と名称

名称	活動の種類	
	療法的活動	療法以外の諸活動
生きもの介在福祉	生きもの介在療法	生きもの介在活動
植物介在福祉	植物介在療法	植物介在活動
動物介在福祉 <sup>2</sup>	動物介在療法	動物介在活動

<sup>2</sup>検索エンジン Yahoo では、動物介在福祉、動物介在福祉論、動物介在福祉学科、動物介在福祉コース、動物介在福祉研究室、動物介在福祉専攻、動物介在福祉士、動物介在福祉会、動物介在福祉研究会、動物介在福祉事業、動物介在福祉活動などの形で検索される。

しあわせを推進するというねらいは、植物を媒体とする場合にも当てはまる。動物介在福祉と対置して称すると、「植物介在福祉」(Plant Assisted Wellbeing; PAW)ということになる(表3)。その療法的活用場面が「植物介在療法」(Plant Assisted Therapy; PAT)である。なお、植物介在療法の英語名の省略形について、筆者(2005a, 2006, 2007; Matsuo 2008)はPLATを用いたが、動物介在療法のAATにならえば、PATが妥当であろう。療法以外での活用場面は、動物介在活動にならって、すでに「植物介在活動」(Plant Assisted Activity; PAA)と称されている例がある(鎌田 2000)。

さらにその考え方を動物と植物を含めたレベルまで拡張してみるとどうなるであろうか。

植物と動物を含めて一般に生物(せいぶつ)と呼ばれるが、私たち人間とのかかわりを考えるときに、親近感を覚える表現は「生きもの」である。その生きものを媒介として人間のしあわせ(幸福)をはかろうとするのは、「生きもの介在福祉」(Bio-Assisted Wellbeing; BAW)ということになる。

そのなかで、療法的活用をはかるのは「生きもの介在療法」(Bio-Assisted Therapy; BAT)である。東京農業大学のバイオセラピー学科における療法領域の名称として使われているのは「生物介在療法」であるが、その読み方についての議論は行われなかった。多くの読者は「せいぶつかいざいりょうほう」と読んでいるのではなかろうか。そして、療法的活用以外の場合には「生きもの介在活動」(Bio-Assisted Activity; BAA)ということになる。

このような言葉がこれまでに使われているかどうか、そしてその頻度はどうかを確認するために、検索エンジン Yahoo によって調べてみた。その結果

が次項の表4である。

動物を用いた福祉、療法、活動に関するウェブ検索件数は、植物の場合に比べると圧倒的に多く、かなり知られていることがわかる。とはいえ、普通の辞書に収録されるほど一般化しているとは必ずしもいえないことが、辞書検索の結果から読み取ることができる。

表3にあげた言葉のうち、生きもの介在福祉(Bio-assisted Wellbeing)、植物介在福祉(Plant Assisted Wellbeing)、生きもの介在療法(Bio-Assisted Therapy)、生きもの介在活動(Bio-Assisted Activity)の検索数は0件であった。植物介在療法(Plant Assisted Therapy)は、ウェブ検索では509件(英語は45件)検索されたが、辞書では検索されなかった。生物介在活動は2件検索され、植物介在活動は1件、Plant Assisted Activityは1件検索されたが、これらはいずれも辞書検索では、出てこなかった(表4)。

これらの結果は、動物を用いた諸福祉活動はかなり知られているが、辞書に普遍的に採録されるほどには市民の間での知名度は高くないこと、植物を用いた諸福祉活動は、動物のそれに比べると、いちじるしく知名度が低い、というより、まだほとんど知られていないことを物語っている。

#### おわりに

本稿で取り上げた話題のうち、動物を介在させる福祉活動の検索件数は、植物のそれより多いところから、植物に比べて知名度が高く、関心も高いことがうかがえる(表4)。検索エンジンで検索されない名称については、新しい名称を提案した。「生きもの介在福祉(Bio-Assisted Wellbeing; BAW)」,「植物

表4 生きもの（動物、植物）を活用する福祉活動に関連する主な言葉の検索結果と新名称の提案

項目	言葉	検索の項目		新しく提案する名称
		ウェブ	辞書	
<福祉>	生きもの介在福祉	0	0	○
	生物介在福祉	0	0	
	Bio-Assisted Wellbeing ; BAW	0	0	○
	Bio-Assisted Welfare	0	0	
	植物介在福祉	0	0	○
	Plant Assisted Wellbeing ; PAW	0	0	○
	Plant Assisted Welfare	0	0	
	動物介在福祉	2140	0	
	Animal Assisted Wellbeing ; AAW	206	0	
Animal Assisted Welfare	1	0		
<療法>	生きもの介在療法	0	0	○
	生物介在療法	242	0	
	Bio-Assisted Therapy ; BAT	0	0	○
	植物介在療法	509	0	
	Plant Assisted Therapy ; PAT	45	0	
	動物介在療法	33700	14	
	動物療法	7020	0	
Animal Assisted Therapy ; AAT	413000	8		
<活動>	生きもの介在活動	0	0	○
	生物介在活動	2	0	
	Bio-Assisted Activity ; BAA	0	0	○
	植物介在活動	1	0	
	Plant Assisted Activity ; PAA	1	0	
	動物介在活動	21100	11	
	Animal Assisted Activity ; AAA	40500	3	

2016年4月18日、検索エンジン Yahoo によって調べた。

介在福祉 (Plant Assisted Wellbeing ; PAW)、「生きもの介在療法 (Bio-Assisted Therapy ; BAT)」、「生きもの介在活動 (Bio-Assisted Activity ; BAA)」である。言葉の整理は、植物や動物を介在させて、それぞれの福祉、療法、活動が論議され、かつ厳密な定義が話題となるときに、混乱を避けるために避けて通れないからである。

とくに、すでに「植物介在療法」という言葉が公になっている現在では、園芸療法関係の学会でも遅かれ早かれ、内容と用語の整合性、端的に言えば、育てるといふ、植物との特別なかかわり方を主に活用する「園芸療法」から、かかわり方のいかに問わない、より広い概念である「植物介在療法」への変更が議論されることになるのは必至であろう。

とはいえ、育てるかかわりを活かす園芸療法の特長とその有効性をよりわかりやすく全員に伝えることが不可欠である。

上のようなことを考えた場合、すでに使用され、

知名度も上がってきている園芸福祉、園芸療法、園芸リクリエーションという用語を、介在という言葉をつけ加えた園芸介在福祉、園芸介在療法、園芸介在活動（または園芸介在リクリエーション）に変更するのかどうか、議論の種になるであろう。

#### 引用文献

- アニマルウェルフェア（動物福祉）推進ネットワーク 2011-2015. 動物福祉とは. <http://www.inunekonet.jp/5freedom.html> 2016年3月21日調べ.
- 芦沢一洋 1992. 園芸の賜物 (The gift of gardening). ANA July: 108-115. National Geographic News Service.
- Grant, C.F. 1996. Gardens make us happy: Exposure to plants answers emotional needs in many individuals. pp.88-91. In: P. Williams and J. Zajicek (eds.). Proceedings People-Plant Interactions in Urban Areas. A Research and Education Symposium. TX. USA.
- Herring, S. 2016.4.18 調べ. Animal Assisted Welfare. Yahoo ウェブ検索.
- 石川 創 2010. 動物福祉とは何か. 日本野生動物医学会誌 15 (1) : 1-3.
- 獣医師広報板 2003. 動物介在療法と動物介在活動. 2016

- 年3月21日調べ。http://www.vets.ne.jp/faq/pc/aat001.html
- 鎌田文聰 2000. 乳幼児と動植物飼育, 栽培活動—岩手の幼稚園・保育園の実態調査(続報2:「有効性」を中心に). pp.80-89: 岩手大学教育学部附属幼稚園, 岩手大学教育学部附属小学校(編). 人権感覚の発達とその指導. 杜陵プリント社.
- 小稲義雄 1981. fare, being. 研究社新英和大辞典 第5版. KK 研究社. 東京.
- 松尾英輔 1986. 緑に囲まれた生活. 朝日園芸百科 30:162-167.
- 松尾英輔 1987. 都市化社会における家庭園芸 第1回「家庭園芸」とは何か. FLOWER SHOP 86: 38-43.
- 松尾英輔 1997. 暮らしと農耕—市民の園芸を考える(1). 農業および園芸 72(1): 9-14.
- 松尾英輔 1998a. 園芸福祉学の提唱. グリーン情報 19(1): 61.
- 松尾英輔 1998b. 園芸療法を探る—癒しと人間らしさを求めて. グリーン情報. 名古屋.
- 松尾英輔 2002. 園芸療法と園芸福祉—植物とのかかわりで心身の癒しと健康, 生活の質(QOL)の向上を目指す—. pp.3-44. 松尾英輔・正山征洋(編): 植物の不思議パワーを探る—心身の癒しと健康を求めて. 九州大学出版会. 福岡市.
- 松尾英輔 2005a. 植物を媒体として用いる療法の位置づけ. グリーン情報 26(9): 67.
- 松尾英輔 2005b. 古くて新しい農学—東京農業大学が取り組むバイオセラピー学科. グリーン情報 26(10): 59.
- 松尾英輔 2006. 人と植物とのかかわりを探る(6)—植物介在療法: 植物にかかわるさまざまな療法とそれらの位置づけ(相互関係)—. 農業および園芸 81(2): 233-241.
- 松尾英輔 2007. 植物に関連するさまざまな療法とその整理—とくに園芸療法と植物介在療法をめぐって—. 人間・植物関係学会雑誌 6(2): 19-29.
- 松尾英輔 2008. 「福祉」の解釈を探る—園芸福祉と園芸療法との関係をよりよく理解するために—. 人間・植物関係学会雑誌 7(2): 23-30.
- 松尾英輔 2011. 人間・園芸植物学の成立と発展—あたりまえの関係を科学する—. 人間・植物関係学会雑誌 10(2): 1-12.
- 松尾英輔 2012. 人と植物とのかかわりを探る(9)—農領域における福祉にみる二つの流れ—. 農業および園芸 87(10): 984-992.
- 松尾英輔 2013. 園芸福祉—園芸の療法的活用とリクリエーション的活用—. 農業および園芸 88(1): 32-42.
- Matsuo, E. 1992. What we may learn through horticultural activities. pp.146-148. In: P.D. Relf (ed.). The role of horticulture in human well-being and social development. Timber Press Inc., Oregon, USA.
- Matsuo, E. 2008. Redefining and classifying the interrelationships of therapies using plants. Acta Horticulturae No.775: 155-159.
- 南野茉莉 1997. 庭からの贈り物. ハンデルスマン, J.の著書“Growing myself -A spiritual journey through gardening-”の翻訳名. KK 講談社. 東京.
- 門間敏幸 2005. バイオセラピー学科: 動物・植物と人間との新たな関係と人間性豊かな人材の育成を目指す. 食農と環境 2: 60-61.
- 岡田朝雄 1996. 庭仕事の愉しみ. ミヒエルス, V. (編). “Freude am Garten”(ヘルマン・ヘッセのエッセイと詩集)を翻訳した本の題名. KK 草思社. 東京.
- ヴァイス, R.F. (山岸 晃訳) 1995. 植物療法. 八坂書房. 東京.